

# GP研究部会

## 大都市周辺自治体における 地域活性化の研究

—「カレーの街よこすか」の事例研究—

2006年6月18日 山下 洋史, 西 剛広

# はじめに (1)

- ◆ 従来より企業において組織活性化への関心: 高い
  - 近年、**地域活性化**への関心も急速に高まり
  - 地方公共団体やその住民・企業
  - 地域活性化のためのさまざまな活動を開始
- ◆ 「カレーの街よこすか」も、こうした流れの中
  - 対外的なアピールという点でかなりの効果
  - とりわけ「**横須賀海軍カレー**」の知名度は高い
  - 休日には市外から多くの人々が横須賀を訪れる  
→ 横須賀のイメージアップや観光の発展に寄与

# はじめに (2)

- ◆ 一方で当の市民の多く
  - ・「カレーの街よこすか」に対して無関心：**ジレンマ**
- ◆ 本研究：こうしたジレンマに焦点を当てた事例研究
  - ・大都市周辺自治体の地域活性化について検討
  - ・まず「カレーの街よこすか」の取組について概観
  - ・「組織活性化」の概念とそのための方法を検討
- ◆ 「カレーの街よこすか」の3種類のジレンマを指摘
  - ・それを克服→地域活性化へのアプローチを示唆
  - ・**小中学生**に対するアプローチの有効性を指摘

# 組織活性化

- ◆ 日本企業：組織活性化に対する関心が高い
  - ・「活性化」という言葉のイメージが非常に良く、使いやすい
  - ・日本のオリジナルの概念（基本的に米国にはない）
  - ・職場活性化・QCサークル活性化・地域活性化・商店街の活性化・ゼミの活性化・授業活性化・クラブ活動活性化 etc.
  - ・But「組織活性化とは？」→あいまいな概念
- ◆ 高橋<sup>1993</sup>：バーナードの組織成立の必要十分条件を満足する組織を「活性化された組織」
  - ①相互に意思を伝達し合いながら（コミュニケーション）
  - ②組織と共有している目的・価値を（協働；コラボレーション）
  - ③能動的に実現していこうとする状態（意欲）

# 一体化度指数と無関心度指数

- ◆ 高橋1993: I-I (Identification - Indifference) chartを提示
  - ・ I-I chart上に活性化された従業員を記述
  - ・ 活性化された人材
    - 一体化度指数: 高, 無関心度指数: 低
- ◆ 一体化度指数: 組織との一体感
  - ・ 組織と目的・価値を共有している程度
- ◆ 無関心度指数: 能動性
  - ・ 無関心圏の大きさ(詳しくは次のスライド)
  - ・ 無関心圏が小さいほど、無関心度指数が低く能動的

# 無関心圏

- ◆ 無関心度圏: 与えられた指示・命令の内容に対して無関心にそれを受容することができる範囲
  - ・各人が固有の無関心圏を持っている
- ◆ 無関心圏が大きい: 受動的
  - ・上司にとっては**従順**な部下
  - ・自分から問題を見つけ解決しようとはしない
- ◆ 無関心圏が小さい: 能動的
  - ・上司にとっては従順な部下とはいえない
  - ・自分から能動的に問題を見つけ解決しようとする

# 学生の無関心度圏(テキスト130頁)

## ◆ 例:学生の無関心度圏



# 高橋のI-I chart

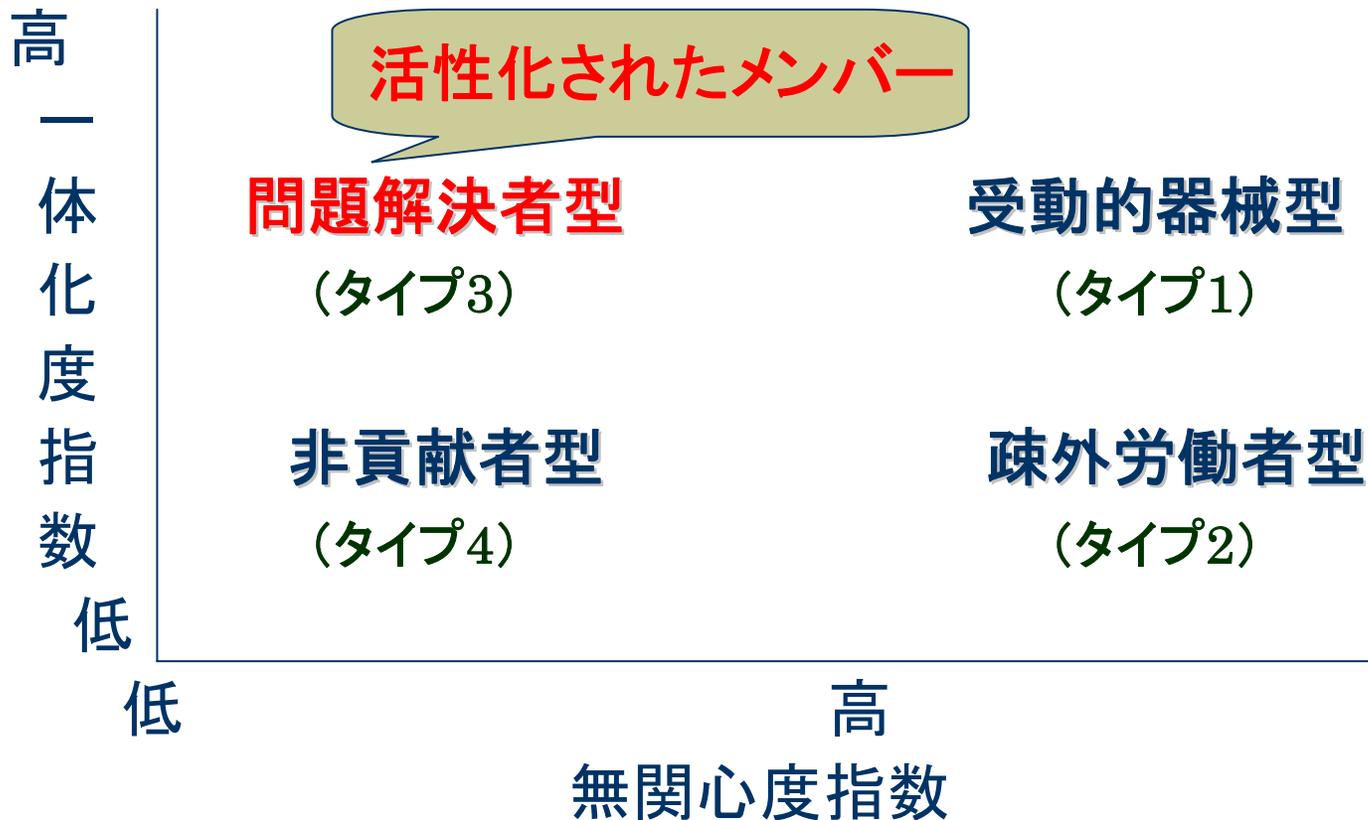


図. 高橋(1993)のI-I chart

# I-I chartの4つのタイプ

- ◆ **問題解決者型**
  - 組織と目的・価値を共有し、かつ能動的な従業員
- ◆ **受動的器械型**
  - 組織の命令には忠実であるが、自分から能動的に行動しようとはしない
- ◆ **疎外労働者型: 公務員タイプ**
  - 目的・価値の点では組織と一線を画しているが、命令には従う
- ◆ **非貢献者型**
  - 能動的ではあるが、**自分勝手**な行動をとる
  - 組織的な行動を期待することができない
  - 日本の組織には少ない(高橋1993)

# I-I chartの特徴

- ◆ I-I chartの非対称性

- ・問題解決者型のとなりに非貢献者型が位置する  
→ **デリケートな関係**
- ・無関心度指数が高いときの受動的器械型と疎外労働者型の差異に比較して、これが低いときの問題解決者型と非貢献者型の**貢献度**の差異は大きい

# 組織におけるメンバーの活性化の カタストロフィー・モデル(テキスト134頁)

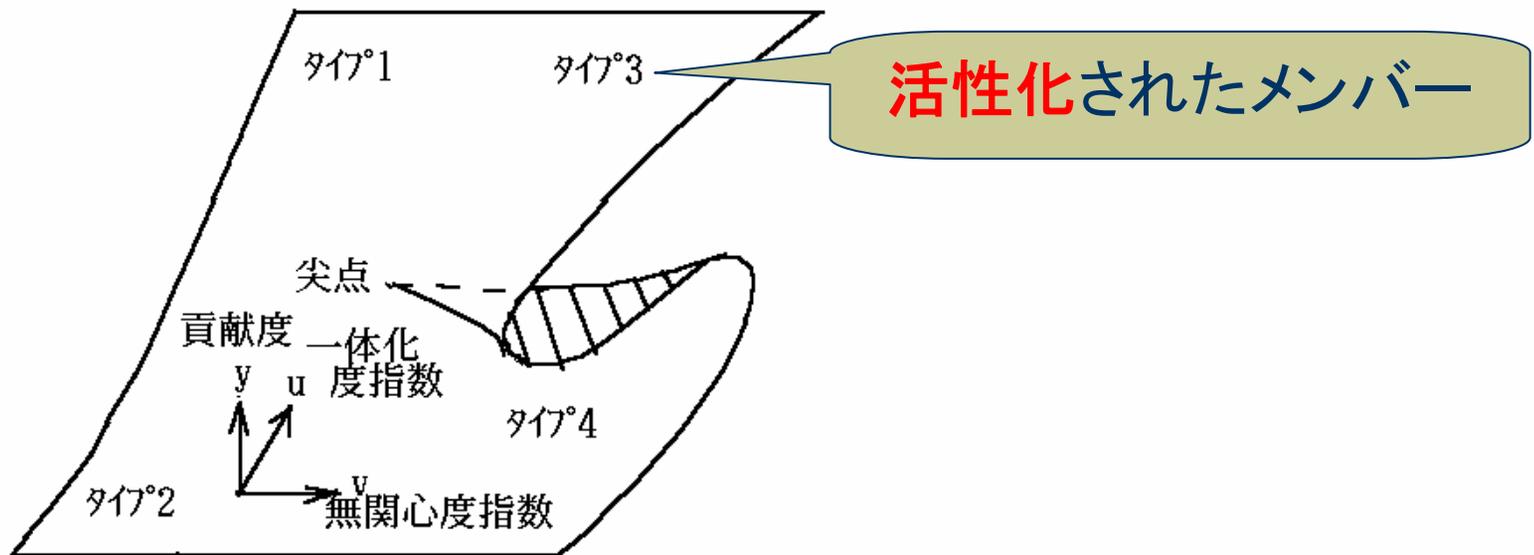


図. 組織におけるメンバーの活性化の  
カタストロフィー・モデル(山下1994)

# モデルの特徴

## 1)無関心度指数が高い場合

一体化度指数の増加とともに貢献度指数は緩やかに連続的に増加するが、低いときは一体化度指数の高低による貢献度の差異が大きい(**非対称性**)

## 2)無関心度指数が低い場合

一体化度指数の変化によって、貢献度指数が**非連続**の動きをする(急激な上昇・下降)

## 3)上記の急激な上昇・下降といったジャンプ

一体化度指数がくさびの尖点の位置( $u=0$ )までいった後、少し遅れて発生する(**遅れの規約**)

# 地域活性化のジレンマ (1)

- 横浜市民的横須賀市民や東京都民的横須賀市民が多い
  - ・ 横須賀市への帰属意識の低い人が多い
  - ・ 地域活性化のための「カレーの街よこすか」が、対外的な成功とは裏腹に市民に浸透しない(ジレンマ1)
- 帰属意識の高い相模湾側(東京湾側は低い)では、ほとんど活動が展開されない
  - 地域間の意識差との不整合(ジレンマ2)

# 地域活性化のジレンマ (2)

- 横浜や東京に通う大人の意識を変えることは困難
  - ・ 「カレーの街よこすか」の積極的なPR活動が必要  
(例えば、市民のためのカレー料理教室)
  - ・ But 行政がカレーばかりを優先することは、
  - ・ 横浜市民的／東京都民的横須賀市民の帰属意識の低さゆえに不公平感を生む(ジレンマ3)
    - 地域活性化の難しさ
- それが逆に横須賀市のハンディキャップであると同時に「強み」
  - 行政主導でなく、ボトムアップ

# タイプ3の横須賀市民

- ◆ 地域に対する活性化されたメンバーとは

地域と目的・価値を共有している度合（一体化度指数）が高く、かつ能動的に問題を見つけ解決しようとする度合が高い（無関心度指数が低い）メンバー

- ◆ タイプ3:「カレーの街よこすか」に対して活性化された市民
  - ・このタイプが相対的に少ないことが問題
  - ・関係者およびアイデンティティの高い一部の市民
  - ・このタイプを多くすることが課題 → 地域活性化

# タイプ1と4の横須賀市民

- ◆ **タイプ1: 相模湾側の市民に多い**
  - 横須賀市民としての一体化度指数は高いので、「カレーの街よこすか」に対する関心を高めることが必要
  - 常に「カレーの街よこすか」の情報提供を行うと同時に
  - カレー教室やカレーに関する各種イベントを通じて
  - **コミットメントの機会**を作り出すというアプローチ
- ◆ **タイプ4: 「カレーの街よこすか」に批判的行動をとる市民**
  - 現在のところ、このタイプは少ないように思われる
  - タイプ2の活性化のためのアプローチを間違えると
  - このタイプを生み出す危険性 → **要注意**

# タイプ2の横須賀市民

- ◆ **タイプ2: 横浜市民的／東京都民的横須賀市民に多い**
  - **東京湾側**の横須賀市民(マジョリティ)
  - 無関心度指数が高いため足を引き張る行動はとらないが
  - カレーに対する市民の盛り上がり欠ける要因
  - 「カレーの街よこすか」の趣旨をよく知ってもらう必要
  - 横浜や東京に通う大人の意識を変えることは容易でない  
(横須賀市内で過ごす時間が少ないから)
  - **小中学生**に対するカレーの食育や各種イベントが有効？
    - ① ほとんど市内で過ごす(市外との交流が少ない)
    - ② 学校教育に取り入れることが可能

# 地域活性化のためプロセス

- ◆ **タイプ2(東京湾側に多い)の活性化プロセス**
  - ・尖点の左を通過してタイプ3になるべき！
  - ・先に**一体化度指数**を高め、その後、**無関心度指数**を低めるべき
  - ・逆だと、いったん**非貢献者型**になってしまう！  
→ **迷信的学習(局所最適化)**
- ◆ **遅れの規約**
  - ・一度タイプ4に陥ると、タイプ3への**ジャンプ**の際
  - ・より大きな**一体化度指数**の変化が必要

# 参考：バタフライの カタストロフィー・モデル

